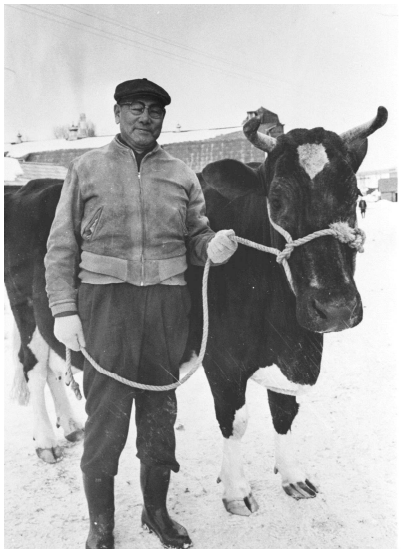
牛づくりの神様

町村敬貴

澄み切った青空。じゅうたんのように青々とした広大な牧草地。その中で悠々と草を食むホルスタイン牛の姿。

北海道を象徴するこの風景は、観光客を魅了するものです。―酪農王国 北海道― その名の通り、現在では乳牛のおよそ六割が、ここ北海道で飼育されています。わが国の酪農は、まず北海道に根を下ろし、そこから全国に枝葉をのばしていきました。その最大の功労者が、多くの酪農家から「牛づくりの神様」と慕われた町村敬貴なのです。

一八八二年、敬貴は真駒内牧牛場内で生まれました。ここはエドウィン・ダンがつくった道内初の牧場で、敬貴の父・町村金弥は、主任として勤務していました。敬貴は七歳までこの牧場で育ちました。毎日畜舎に通い、「牛を見ると泣きやみ、牛をおもちゃがわりとした」日々を送りました。これが酪農に生涯を懸ける敬貴の原点となったのです。



〔江別市旧町村農場所蔵〕

一九〇三年、敬貴は、札幌農学校（現在の北海道大学）の農芸伝習科に入学しました。入学と同時に、父の愛弟子である宇都宮仙太郎の牧場で朝夕の搾乳実習を始めました。宇都宮は、自身の留学の体験をもとに、アメリカ酪農の実情について敬貴によく語り聞かせました。敬貴は、宇都宮の話に刺激を受け、卒業と同時にアメリカに渡ることを固く決心していました。

一九〇六年、農学校卒業後、敬貴はすぐに一人でアメリカへ武者修行に旅立ちました。二十三歳のことでした。身寄りもなければ、言葉も通じないアメリカで、次々と大きな試練が降りかかりました。船の中で出会った日本人に言いくるめられ、バンクーバー沖合いの小島でマグロ漁に従事する事態に陥ってしまったのです。必死に談判し、目的地のシアトルまで送ってもらうことになりました。しかし、案内人は預けた所持金を持ったまま雲隠れし、敬貴は無一文の状態でシアトルにたどり着きました。

シアトルに着いた後、敬貴は、牧場を探しました。敬貴

は、アメリカで成功したり、アメリカに永住したりすることが目的ではなく、あくまで酪農を勉強し、北海道に帰ってその経験を生かしたいと考えていたため、働く場所は何が何でも牧場を選びたいと考えていました。

しかし、やっとの思いで探し当てた牧場でも、雇い主からは、夜になると家から出され、森の中の小屋で一人で寝るように言われる始末でした。

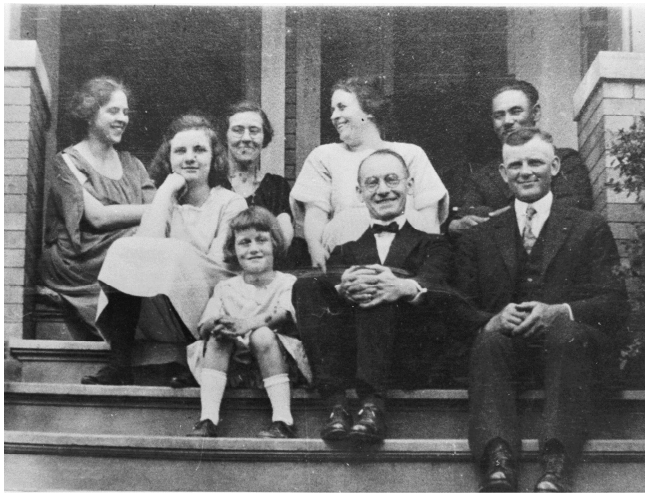
「相当の覚悟をして渡米した私だが、あまりのきびしさにとうとう泣いてしまった。すると壊れた窓から大きな顔がのぞいている。びっくりした。しかし、よくよく見ると人間のにおいをかぎつけてきた牛の顔であった。米国の牧場生活の第一夜は、牛に迎えられたのだった。」

敬貴は、アメリカには苦労をしにきたと決心していたことから、どんなにひどい待遇でも、自分から逃げ出そうとはしませんでした。

一九〇七年五月、宇都宮の紹介により、念願だったウィスコンシン州のラスト牧場で働くことになりましたが、生活は変わらず、苦しいものでした。朝の四時半から夜の九時過ぎまで重労働に耐え、休みなく働きました。

「ラスト牧場の主人は、私が根掘り葉掘り聞いても親切に教えてくれた。気持ちは苦しくなく、むしろ愉快だった。渡米して四年目には、ウィスコンシン州立農科大学にも入学することになった。」

敬貴は、このラスト牧場で「よい土壌はよい牧草を育て、よい牧草はよい牛を育てる」という酪農の原理をつかみました。そしてこの頃から、日本でも乳牛の主流をホルスタイン牛にすべきだと考えるようになりました。



〔ラスト牧場時代の敬貴〕

一九一六年の秋、十年間にわたるアメリカ修行を終え、北海道で牧場経営を始めようと帰国しました。しかし、土地、畜舎の建設、牛の購入には、莫大な資金が必要です。資金がない敬貴は、やむをえず、東京で牛乳販売業を始めました。

それでも、夢を捨てることができない敬貴は、翌年、北海道へ戻り、以前、父親が購入していた石狩郡樽川（現在

の石狩市花川）で牧場を始めました。しかし、その土地は農地には適さない、北国特有の泥炭地でした。加えて、アメリカから輸入したホルスタイン牛のおよそ八割が病気のため流産し、敬貴の船出は、散々なものでした。土から水を追い出す*暗きょを施し、十年間に及ぶ土づくり・草づくりは、それなりの成果を残しました。しかし、もともと劣悪な土地には限界がありました。良質の牧草ができないことは、牛づくりに致命的で、農場の移転を決意しました。

一九二七年、知人から紹介された移転先の江別町対雁（現在の江別市いずみ野周辺）へ視察に出向きましたが、あまりのひどさに目を疑うばかりでした。

「草が一本も生えていない！」

かつてここは屯田兵村で、長い間肥料を与えず、半世紀にわたって作物を取るだけ取って地味のやせた土地だったのです。これには、長年、敬貴の力になってくれた宇都宮も苦言を呈しました。

「町村君、考え直しなさい。あまりにも無謀だ。」

「いいえ、宇都宮さん。悩み抜いた末の結論です。」

敬貴は、まず、土を調べ、野幌のれんが工場に土管の製造を依頼し、それを用いた暗きょ排水を行いました。これに目途がつくと、製紙工場から譲り受けた石灰を大量に投入し続け、土壌の改良に取り組みました。

対雁に移転して十年が過ぎる頃、町村牧場は立派な牧草が育つ草地となり、その成果は、全国的に注目を集めました。北海道庁もその意義を認め、敬貴が訴え続け、実践してきた「土をつくる農業」、「牛とともに歩む農業」そして「土地改良」の方針を打ち出すようになったのです。

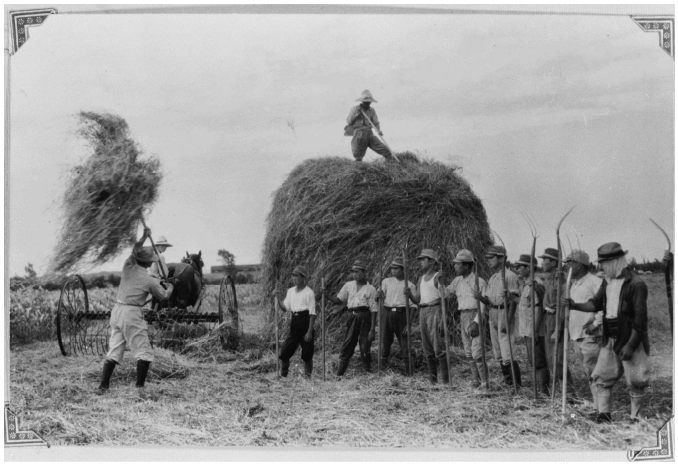
現在では、酪農の基本理念と言われている「土づくり・草づくり・牛づくり」に批判と冷笑を浴びながらも、黙々と身をもって取り組んだのは、彼が最初の人物でした。その知識と経験、そして血のにじむような努力が、近代酪農の一時代を築き上げたのです。

その後の彼の足跡は、日本の酪農の歴史そのものでした。多くの優秀なホルスタイン牛を輩出する町村農場は、全国的に注目され、たくさんの農業実習生を迎え入れるようになりました。多忙な毎日を過ごす中でも、仕事の全ては「牛づくり」という一点を貫いていました。日課として行っていた牛舎の見回りを決して欠かすことなく、八十歳を過ぎても日本の酪農業を発展させようという一心で、海外の酪農事情視察を続けるほどでした。

敬貴は、農業について次のように語っています。

「大自然と動物に対する愛着さえもっていれば、（農業は）必ず成功します。私は、愛とは、誠意ある熱意だと思っています。だから牛がかわいいというだけでは不十分です。牛が喜んでくれる、働いてくれる。そしておいしい牛乳を出してくれる。そのためにはどうするか。簡単ですよ。草に感謝すればいい。草に感謝をすれば、必ず牛に感謝されるのですから。」

わが国におけるホルスタイン牛の血統を調べると、そのおよそ九割は敬貴が手がけたか、町村牧場産出の血統だといわれています。今も全国の農場に、敬貴の精神が脈々と息づいているのです。



〔町村農場における実習中の様子〕

一八八二	札幌真駒内で生まれる
一九〇三	札幌農学校（現在の北海道大学）農芸伝習科に入学する（二十歳）
一九〇六	アメリカへ渡る（二十三歳）
一九一〇	ウィスコンシン州立農科大学酪農科に入学する（二十七歳）
一九一六	帰国後、東京都中野区で牛乳販売業を開始する（三十三歳）
一九一七	石狩郡樽川（たるかわ）（現在の石狩市花川）に町村農場を開設する（三十四歳）
一九二八	江別町対雁（ついしかり）（現在の江別市いずみ野周辺）に農場を移転する（四十五歳）
一九六九	江別で死去する（八十六歳）

＊暗きょ…地下に設けるなどしてふたをかけた水路